大学生が困っていること及び関連する心理学的要因

――日本人大学生のインターパーソナルな問題について――

栗田　智未*・内野　悌司**・小島奈々恵***
黄　　正国****・大島　啓利*****

（受付　2019 年 5 月 14 日）

1. 目　　的

2012 年（平成24年）以降我が国の自殺者の総数は 3 万人を下回ったが，中高年男性の自殺死亡率は減少している一方で，自殺死亡者の年齢分布における若年成人が増加している。それに基づき，平成24年の自殺総合対策大綱の見直しにおいて若年層向けの対策の充実化が提起された。平成28年における年齢階級別の死因順位では，15～39歳の 5 歳ごとにみた死亡原因の第一位は自殺であった。こうした状況は国際的に見ても深刻であり，若い世代で死因の一位が自殺となっているのは先進国では日本のみであり，その死亡率も他の国に比べて高い（厚生労働省，2018）。自殺対策基本法が制定され国や地方自治体が積極的に自殺対策に取り組み，大学においても対策が必要とされるようになった。国立大学法人保健管理施設協議会は自殺者を発生させるリスク要因をできる限り大学の生活環境から排除するために何ができるかという視点から自殺対策を考えることが大切であるとして「大学生の自殺対策ガイドライン2010」を策定した。日本学生相談学会も学生の自殺防止は高等教育機関における喫緊の課題であり，大学コミュニティ全体で行うものであるとし，「学生の自殺防止のためのガイドライン（2014）」を策定した。

大学生の自殺の背景には，従来指摘されてきた精神疾患や自殺関連行動，喪失体験などの自殺リスク要因の他に，学生生活不適応や留年や単位取得不良などの学業不振，研究活動や論文執筆などの長時間作業，就職困難などがある（国立大学法人保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会自殺問題対策ワーキンググループ，2010）。しかもその自殺者の 8 割は保健管理センターなどの相談機関を利用することなく死に至っていることから，学生が支援を必要

* 福井大学保健管理センター
** 広島修道大学健康科学部心理学科
*** 東北大学高度教養教育・学生支援機構
**** 広島大学保健管理センター
***** 広島修道大学学生相談室

とする状態であったとしても相談機関に助けを求めない，あるいは求めることができない状況があることが窺える。

近年の筆者らの自殺対策の取り組みにおける実践および研究結果から，自殺完遂および未遂，自傷行為の背後にある特徴や危険因子として新たに特別な配慮を必要とするものとして明らかになったのが，自閉スペクトラム特性をもつ学生，留学生の精神的健康，虐待や性犯罪等の被害経験のある学生，セクシャルマイノリティに関する問題をもつ学生等である。そのような危険因子をもつ学生を対象とした特定の施策を講じるとともに，支援を必要とする学生を対象とするだけでなく，学生全体に向けたヘルスプロモーションの向上をめざす心理教育プログラムを開発し，より広く利用できるようにすることは，若年層向けの自殺対策の充実化に資することが期待される。

本研究は，学生の直面する生きづらさ，および苦境を切り抜けるプロセスにおける保護因子に焦点を当て，学生がどのようなことに困っているか，困難があるかについて，その内容を明らかにし，それらに関連する心理学的要因について，検討することを目的としている。

2. 方　　法

1）調査対象：筆者らが所属する学生相談機関において，担当した相談事例 1 年分を対象とした。

2）調査項目：所属，在籍年数，性別，支援開始時の年齢，出身国，相談内容。本研究で用いない調査項目については省略する。

3）分析方法：発表者らが学生相談機関で担当した 1 年間の相談事例の記録をもとに，以下の手順で対象データを整理，分析した。

①各事例の相談内容を学生の直面している困難の具体的内容およびその状況や背景等の文脈を短文で要約し，事例の困りごとに関する心理学的キーワードを複数併記し，調査項目と合わせてデータベース（Excel ファイル）を作成した。

②相談内容に応じて困っていることを KJ 法に準ずる方法で11の相談カテゴリー（修学上のこと，進路のこと，就職のこと，生活上のこと，身体面のこと，心理的悩み，性格のこと，対人関係のこと，コミュニケーションのこと，ハラスメントのこと，その他）に分類した。

③相談カテゴリー別に困っていることを抽出した。その際，相談事例の記録の要約に併記したキーワードに注目して相談カテゴリー別に具体的内容を抽出し，困っていることの特徴を捉えたモデル事例を作成した。なお，相談内容の分類の集計では，困っていることに該当するメインカテゴリーを事例ごとに 1 つ特定し，複数のカテゴリーに該当するものはサブカテゴリー（複数選択可）として集計した。

本研究では，相談内容の分類でインターパーソナルな問題として，「対人関係のこと」，「コミュニケーションのこと」，「ハラスメントのこと」に加え，「その他」のカテゴリーに該当するケースについて，日本人学生の悩みの特徴や心理学的要因を抽出し，検討した。

3. 結　　果

(1) 調査対象の属性

180事例の属性による内訳は以下の通りである。日本人学生134事例（男性77名，女性57名），外国人留学生46事例（男性21名，女性25名）。性別については，男性が98名（日本人：77，外国人留学生：21。以下括弧内は日本人，外国人留学生の順で記述），女性82名（57，25）。所属については，学部学生96名（95，1），大学院修士課程47名（34，13），大学院博士課程20名（5，15），その他（短期交換留学生）17名（0，17）であった。

(2) 相談カテゴリーの集計

表1　相談カテゴリー別の集計

相談カテゴリー	メインカテゴリー集計数			サブカテゴリー集計数		
	日本人	留学生	小計	日本人	留学生	小計
01. 修学・履修上のこと	25	11	36	13	12	25
02. 進路のこと	8	0	8	18	0	18
03. 就職のこと	3	1	4	8	2	10
04. 生活上のこと	6	2	8	16	3	19
05. 身体面のこと	1	4	5	16	1	17
06. 心理的悩み	51	14	65	28	2	30
07. 性格のこと	12	2	14	46	5	51
08. 対人関係のこと	20	5	25	57	14	71
09. コミュニケーション	3	0	3	37	8	45
10. ハラスメントのこと	2	1	3	2	0	2
11. その他	3	6	9	1	1	2
合　計	134	46	180	242	48	290

(3) 相談カテゴリー：「対人関係のこと」

「対人関係のこと」についての日本人学生の困っていることの特徴は，＜対人関係の苦手さ＞，＜コミュニケーションの不得手さ＞，＜感情の表現・コントロールの難しさ＞が抽出された。モデル事例は，表2のとおりである。

表 2　「対人関係のこと」のモデル事例

	内　容	困っていることの特徴
モデル事例 1	人付き合いが苦手で周囲の人となかなか打ち解けられず，周囲に馴染めない。	対人関係の苦手さ，コミュニケーションの不得手さ
モデル事例 2	人付き合いに対し苦手意識を感じている自分は，このままではいけないのではないかと思う。	対人関係の苦手さ
モデル事例 3	同級生との間でトラブルが生じ，関係が悪くなっている。関係を修復したいが，気持ちや考えをうまく伝えられない。	コミュニケーションの不得手さ，感情の表現・コントロールの難しさ

(4)　相談カテゴリー：「コミュニケーションのこと」

「コミュニケーションのこと」について日本人学生の困っていることの特徴は，＜わかりやすい伝え方の苦手さ＞，＜共感的な対話の苦手さ＞，＜何をどのように話すかの苦手さ＞が抽出された。モデル事例は，表 3 のとおりである。

表 3　「コミュニケーションのこと」のモデル事例

	内　容	困っていることの特徴
モデル事例 1	自分から人の輪の中に入っていくことができない。何を話せばいいのか分からないから，話しかけることができない。	何をどのように話すかの苦手さ
モデル事例 2	周囲の人から，相手の立場を考えて話したり聞いたりすることができていないと言われる。	共感的な対話の苦手さ
モデル事例 3	話が分からない，説明が分かりにくいとよく言われる。	わかりやすい伝え方の苦手さ

(5)　相談カテゴリー：「ハラスメントのこと」

「ハラスメントのこと」について日本人学生の困っていることの特徴は，＜研究指導の不足＞，＜指導教員の威圧的発言＞が抽出された。モデル事例は，表 4 のとおりである。

表 4　「ハラスメントのこと」のモデル事例

	内　容	困っていることの特徴
モデル事例 1	研究の進み具合が遅く，行き詰まりを感じ，指導教員に相談した。自分の能力のなさを指摘され，卒業させられないと言われた。指導教員に会うと動悸がして研究室に行けない。	指導教員の威圧的発言
モデル事例 2	指導教員から研究と関連のない雑用ばかり任され，研究指導を十分に受けられていない。このまま研究できず，修了できないのではないか不安である。	研究指導の不足

(6)　相談カテゴリー：「その他」

「その他」の困っていることの日本人学生の特徴は，＜性的指向＞，＜被害者心理＞が抽出

された。モデル事例は，表５のとおりである。

表５　「その他」のモデル事例

	内　容	困っていることの特徴
モデル事例１	同性を好きになることに罪悪感があり，辛い。好きな人に自分の気持ちを伝えられないし，伝えて変な人と思われたくない。	性的指向
モデル事例２	周囲が同性愛を笑うネタで盛り上がると，自分が笑われている気分がして辛い。	性的指向
モデル事例３	事件の被害に遭って以降，物音などに過剰に反応したりビクビクしたりするので，自分がおかしくなったのではないかと感じる。	被害者心理
モデル事例４	被害に遭った自分にも非があったのではないかと自分を責めて気持ちが沈む。	被害者心理

4. 考　　察

インターパーソナルな問題の相談カテゴリーの中では，「対人関係のこと」の事例が最も多く，「コミュニケーションのこと」，「ハラスメントのこと」が続いた。「その他」として，「性的指向」や「被害者心理」のケースがあった。

(1)　各相談カテゴリーの困っていることの特徴と心理学的要因

1)　対人関係のこと

「対人関係のこと」で困っていることの特徴は，＜対人関係の苦手さ＞，＜コミュニケーションの不得手さ＞，＜感情の表現・コントロールの難しさ＞であった。

まず，＜対人関係の苦手さ＞について，対人関係の苦手さというのは，《モデル事例１》や《モデル事例２》のように人付き合いが苦手であるという感覚や意識があり，それによって対人関係の悩みを抱くということである。この＜対人関係の苦手さ＞について，森田（2001）は対人苦手意識として，大学生の対人関係の悩みの特徴として指摘し，対人苦手意識には，対人劣等感，対人抵抗感，対人緊張感が含まれるとしている。したがって，対人苦手意識は個人の円滑な対人関係や対人適応を阻害する要因に成り得ると考えられる。これに対して，社会的スキルは他者との良好な関係構築に重要な役割を果たす要因とされている（日向野，2008）。社会的スキルについては，いくつか概念定義がなされているが（相川，2001；Argyle，1981），総じて，他者との円滑な対人関係を築き，維持していくための適応能力としてとらえられる。その場合，対人苦手意識は抑制要因となり，社会的スキルは促進要因となり得ることがわかる。両者の関連を考えてみると，他者に対する苦手意識が高い場合は，社会的スキルが低いことが原因になることも予測される（日向野，2005）。反対に，社会的スキルを備え

ていれば，対人苦手意識が低くなる可能性が考えられる。社会的スキルは，対人関係を円滑に運営する能力であり，学習可能である（相川，2001）ことから，対人苦手意識を緩和するためには，社会的スキルの習得が重要であると考えられる。

次に，「対人関係のこと」で困っていることの特徴として，＜コミュニケーションの不得手さ＞，＜感情の表現・コントロールの難しさ＞について，いずれも社会的スキルに含まれるコミュニケーションスキルの不得手さ・難しさといえる。《モデル事例 2 》や《モデル事例 3 》のようなコミュニケーションスキルの未熟さ・拙劣さと，先述した対人苦手意識は関連していることが窺われる。つまり，対人関係の悩みの背景には，＜対人関係の苦手さ＞，＜コミュニケーションの不得手さ＞，＜感情の表現・コントロールの難しさ＞が各々独立して存在するのではなく，それぞれが複雑に絡み合っていることが推測される。「対人関係のこと」の悩みや問題に取り組むには，社会的スキルの中でもコミュニケーションスキルに焦点を当てて学習やトレーニングすることが効果的と考えられる。

2)　コミュニケーションのこと

「コミュニケーションのこと」で困っていることの特徴は，＜何をどのように話すかの苦手さ＞，＜共感的な対話の苦手さ＞，＜わかりやすい伝え方の苦手さ＞だった。その中身としては，発達障害（あるいはその傾向が推察される）によるもの，性格特性に由来するもの，多かれ少なかれコミュニケーションを苦手とするものがあった。この結果は，学生が抱えるコミュニケーションにかかわる困難についての梅原（2011）の指摘と同様であった。梅原（2011）は，4 つの層で学生をとらえ，各層の学生はキャンパスにまんべんなく存在しているという。4 つの層とは，①発達障害というハンディをもって学生生活を送っている学生，②明確にそうであるとは言えないかもしれないが①の傾向が多分に見られる学生，③障害にはあたらないが本人の性格特性からコミュニケーションに困難を抱える学生，④多かれ少なかれコミュニケーションを苦手とする一般学生，と指摘している。本研究では，①のように，発達障害を学生が自認しコミュニケーションに困り感を抱いているというケースに限らず，学生の困っていることの特徴はよく類似していた。この類似性は，本研究の調査対象者のコミュニケーションの困り感の一般性を示唆するものと考えられる。

＜何をどのように話すかの苦手さ＞について。《モデル事例 1 》において，多かれ少なかれコミュニケーションを苦手とする学生の中には，人と接する時に何を言えばいいのか，話しかければいいのか分からないという＜何をどのように話すかの苦手さ＞を訴える学生は少なからず存在し，一歩踏み込む勇気のもてなさ，消極性，引っ込み思案といった性格特性をその理由にすることがある。一方，発達障害の傾向が窺える学生の場合は，人との付き合い方のルールや社会の常識が分かりにくいという特徴があり，具体的手続きとして何をどのように話せばいいのか分からないことによる＜何をどのように話すかの苦手さ＞がある。いわゆ

る社会性の障害と呼ばれるところで，相手の気持ちや意図を想像したり，その場の空気や，しきたりやしがらみなどの暗黙のうちに成立している社会的ルールを感じたり理解するのが苦手なためである。想像したり理解したりできないことからくる不安や失敗体験から，何をどのように話すかの難しさや苦手さとして困り感を抱くと考えられる。

＜共感的な対話の苦手さ＞について。《モデル事例２》で示されたように，＜共感的な対話の苦手さ＞は，相手の立場を考える想像力の欠如や相手と交互にやりとりすることの難しさから生じていると考えられる。対人関係における情緒的な交互交流体験が乏しい学生は，相手の心情を推し量ることや共感的なかかわりのもち方が分からないことや，体験不足ゆえに相手の立場を考えようとしても想像できず，共感的に対話することに困難さを感じるのではないかと考えられる。一方，発達障害の傾向が窺われる学生は，自分の感情を表現したり，自分の発言や行動が他人に与える印象を想像することが苦手な人も多く，このため率直すぎる発言をしてしまうことで《モデル事例２》のように周囲から指摘を受けたり，対人関係のトラブルの一因となりうる。そのようなことから，発達障害の傾向が窺える学生は，他者とのやりとりのうまくいかなさや苦手さを感じ，問題として認識するのではないかと推測する。

＜わかりやすい伝え方の苦手さ＞について。《モデル事例３》で示されたように，＜わかりやすい伝え方の苦手さ＞は，コミュニケーションスキルそのものの難しさ・苦手さである。発達障害の特性として，言葉の使い方が独特であるため，他人との意思疎通がスムーズに行われにくい傾向がある。文脈や，言外に含まれる意図を読み取ることが苦手で，相手の発言を文字通りに受け取ってしまい，相手の声のトーンや表情，身振り・手振りから真意を読み取ることや，ユーモア，お世辞，皮肉，比喩を理解することが苦手な人が多い。耳から入ってくる聴覚情報の処理が苦手なために，視覚的な情報のほうが理解しやすいという特性もあり，そのため，会話についていけなくなることもある。多少なりともこのような特性をもつ学生は，他者とのコミュニケーションに難しさを感じ，自分から発信するにも苦手さを感じることになるだろう。

以上，「コミュニケーションのこと」で困っていることの特徴から，背景には発達障害（あるいはその傾向も含む）の特性によるものもあれば，性格特性やコミュニケーションスキルの不足・苦手さによるものがあることが窺えた。発達障害のように切実な固有の課題には独自のサポート体制で個別に対応していくことが必要ではあるが，性格特性やコミュニケーションスキルの不足・苦手さについては，学生全体に対して働きかけを行うような教育的アプローチで対応していくほか，個別に自分自身で対処できるようなスキル学習などが必要であると考える。

3)　ハラスメントのこと

「ハラスメントのこと」では，困っていることの特徴として，＜指導教員の威圧的発言＞，

＜研究指導の不足＞が抽出された。所属する研究室やゼミなどでの教員との関係によるもので，主に指導教員からのアカデミック・ハラスメントであった。《モデル事例 1 》《モデル事例 2 》で示したように，広い意味で解釈すると，ハラスメントも指導教員と学生の間の対人関係の問題としてとらえることが可能かもしれない。ハラスメントへの対処として，指導教員と話し合いの場を持つ方法や状況を打開するための方法を考えるにしても，一人で抱え込むのではなく，身近な信頼できる人に相談したり，ハラスメント相談室や学生相談室など専門家に相談したりすることが必要である。

4)　その他のこと

「その他」では，困っていることの特徴として，＜性的指向＞と＜被害者心理＞が抽出された。

＜性的指向＞では，恋愛・性愛が同性に向かう同性愛についてであった。性的マイノリティは，日本の人口の8.9%（電通ダイバーシティ・ラボ LGBT 調査，2018）とするものもあり，調査の度にその数字は上昇している。見た目やしぐさでは判別できず，また，公表することは非常にハードルが高いと言われており，当事者が周囲に伝えていないケースもある。実際には必ずしも偏見に基づくものとは言えなくとも，性的指向や性自認にかかわる言動が当事者を不快にさせることがある。《モデル事例 2 》のように，当事者は，こうした言動を見聞きして不快に感じても声を上げづらいのが現実である。

＜被害者心理＞では，事件や事故等で被害に遭った後の心理的反応・影響についてであった。事件・事故に遭遇した後に体験する一般的な心理的反応，心理状態，ネガティブな影響について，十分に知られているとは言えない。事件・事故の被害者が困っていることは，事件・事故の損害・被害そのものだけでなく，モデル事例に示したような事件・事故に遭って引き起こされた症状や認知・思考も重大である。

＜性的指向＞＜被害者心理＞のいずれにおいても，一人で抱え込むことなく，公的に設置された相談窓口・機関や学生相談室など専門家に相談することが望ましい。

(2)　困っていることの背景・文化的要因

インターパーソナルな問題の困っていることの特徴から見ると，日本人学生における問題の背景として，次の 3 つの要因（＜年齢の上下関係を気にすること＞，＜周囲の雰囲気を読み取ろうとすること＞，＜思っていることを言わないこと＞）があり，コミュニケーションスキルとの関連が考えられた。

1 つめは，＜年齢の上下関係を気にすること＞である。個人主義の文化の人々と比べ，集団主義の文化の日本では人々は自分の属している集団内部の関係，地位の異なる人の上下関係により注意・関心を払う（マツモト・工藤，1996)。日本人の人付き合いの特徴について，

中国人と比較した毛・大坊（2006）の調査においても，上下関係を意識した人付き合いをすることが挙げられている。学生の日常生活場面やコミュニティにおいて生じる上下関係として，授業やゼミでは，教員―学生，先輩―後輩の関係，部活動やアルバイト先では，部長―部員，上司―部下，先輩―後輩の関係がある。それぞれの対人場面で上下関係に応じた言葉遣いや振る舞い方があり，状況や相手との関係を見極めて対応する必要がある。「個人主義と集団主義」，「地位の区別」は文化比較の際にしばしば用いられているが，目上に対する行動と目下に対する行動を区別するのは日本のような集団主義の文化に特徴的なものである（中島，2011）。日本人はタテの関係を重視し，上下関係を明らかにする傾向がある（中根，1967）のは，相手との関係を見極め，どのように振る舞うかを選択し，関係に応じた方法で接しようとするからではないかと考える。学生においては，上下関係が一番分かりやすくはっきり判断できる年齢に注目し，自分と相手との関係や距離感を位置づけ，接し方やかかわり方を考えようとするのだろうと推測される。ただ，その上下関係にふさわしい振る舞いやかかわり方がわからなかったり，ソーシャルスキル（対人スキルやコミュニケーションスキルを含む）が未熟であったりすると，悩みや問題が生じるのだろうと考えられる。

２つめは，＜周囲の雰囲気を読み取ろうとすること＞である。日本人の人付き合いの特徴について，中国人と比較した毛・大坊（2006）の調査においても，和を維持しようとしたり，相手に気を遣うことが挙げられており，その場の空気や様子を窺って対人関係を円滑に営みたいという心理が働いている。このような周囲の雰囲気や空気を読み取り，合わせることについて，中島（2011）によると，日本語学習を行う外国人にとって，日本人同士の会話場面に直面した際，瞬時にその地位に関する上下関係を見抜き，次にその相手にふさわしい表情表出を行いながら会話に参加することは決して易しい作業ではないという。そのため，日本人学生の「周囲の雰囲気を読み取ろうとする」ことは，日本に留学してくる外国人留学生が抱える特有の問題とも関連している。言語の問題を抱えている上に，“空気を読むこと”や“察すること”など，日本人特有の対人関係の持ち方やコミュニケーションのパターンがあるために，日本人（指導教員，日本人学生等）とのコミュニケーションがより難しくなる。

周囲の雰囲気を見て，読み取り，顔の表情だけでなく，しぐさや姿勢，視線行動といった日本人特有の非言語チャネルを理解することは，社会的スキルを向上させる意味でも重要なコミュニケーションツールになるという（中島，2011）。そうなると，周囲の雰囲気を読み取ろうとするのは，日本人のコミュニケーションのローカルルールといえるのかもしれない。この周囲の雰囲気を読み取ろうとするスキルの不足を自覚したり，あるいはスキルに自信がない場合に，インターパーソナルな悩みや問題として表面化してくるのだろうと考えられる。

３つめは，＜思っていることを言わないこと＞である。日本人の人付き合いの特徴について，中国人と比較した毛・大坊（2006）の調査においても，意見や本音を表出しないことや

言動の曖昧さが挙げられている。欧米に比べて日本では「他者からのまなざし」への意識が高く，集団の中に融合された自己が特徴的である（梶田，1998）。個としての意見や価値観をもつことが強く求められる欧米諸国と違い，思っていることを言わずに周囲に合わせて個を目立たなくさせる傾向が考えられる。これは，先述した＜周囲の雰囲気を読み取ろうとすること＞に関連していると考えられる。周囲の雰囲気を読み取り，何を言う・言わないかを考え，素直に思っていることを言わないのは，対人場面におけるコミュニケーションの一連の流れに組み込まれている。察知して表出しないという日本的な対人スキルである（Takai & Ota，1994）。思っていることを言わない文化のなかで，思っていることを言うことは，言う側にとってはハードルが高いことであり，言われる側としても戸惑いがあるだろう。従って，双方が馴染むコミュニケーションスキルを習得することが必要であり，例えば，相手も自分も尊重するアサーショントレーニングなどが重要なのだろうと考えられる。

以上のように，日本人学生のインターパーソナルな問題では，その文化的背景を踏まえ，自分を表現する方法としてコミュニケーションスキルを身につけていくことが問題の解決に結び付くと考えられる。外国人留学生については，日本文化の在り様や日本人特有のコミュニケーションについて理解を深められるよう，またその文化的背景の中で自分自身を表現し周囲に伝えていけるよう支援していくことが必要と思われる。

(3)　学内外の社会資源の整備が必要，相談を促す

インターパーソナル問題はイントラパーソナルな問題と異なり，他者との関係の中で生じる問題である。そのため，問題を解消していく上では，環境調整を行うことが一つの手段である。それを行うためにも，一人で抱え込まずに，他者や専門家，相談機関に相談することが必要であり，相談してみようという態度を養成し来談を促進することが必要である。

また，インターパーソナルな問題で困っていることの特徴や背景から，ソーシャルスキル（対人スキル，コミュニケーションスキル等）の習得やスキルアップの重要性が明らかとなった。学生が困難と直面している分野でのスキルを学ぶことは，問題や生きにくさを解消していくことに繋がる。学生が困難を自分自身で対処し軽減することを目標にスキルを身につける学習の機会を提供することが必要である。

相談機関や学習の機会など，学内外の資源や社会的な資源を学生が十分活用できるように整備していく必要がある。

【文　　献】

相川充（2001）．人づきあいの技術――社会的スキルの心理学――．サイエンス社.
Argyle, M. (1981). The nature of social skill.　In M. Argyle (Ed.), *Social skills and health.* 1－30.

電通ダイバーシティ・ラボ LGBT 調査（2018）．*http://www.dentsu.co.jp/news/release/2019/0110-009728.html*（2019年 3 月 6 日閲覧）．
独立行政法人日本学生支援機構（2017）．大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査（平成27年度）集計報告．
日向野智子（2006）．対人苦手意識と社会的スキルとの関連．日本パーソナリティ心理学会発表論文集，15，158－159．
日向野智子（2008）．対人苦手意識の生起と相互作用の過程に関わる社会的スキル――一般的他者に対する社会的スキルと苦手な他者に対する社会的スキルにおける質的差異の検討――．立正大学心理学部研究紀要，6，39－49．
梶田叡一（1998）．自己意識の心理学．東京大学出版会．
工藤力・デイビットマツモト（1996）．日本人の感情世界――ミステリアスな文化の謎を解く――．誠信書房．
国立大学法人保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会自殺問題検討ワーキンググループ（2010）．大学生の自殺対策ガイドライン 2010．*https://www.nitech.ac.jp/campus/counsel/files/mentalrescue_guideline.pdf*（2019/04/24取得）．
厚生労働省（2018）．平成30年版自殺対策白書，12．
森田美弥子（2001）．対人関係の相談事例から．鶴田和美（編）学生のための心理相談――大学カウンセラーからのメッセージ．培風館．
毛新華・大坊郁夫（2006）．中国の若者の人づきあいスタイルについての研究：自由記述調査によるカテゴリカルな検討．対人社会心理学研究，6，81－88．
中島透（2011）．日本人の対人行動における上下関係とその解読力向上のための外国人教育の試み．国際交流基金日本語教育紀要，7，59－70．
中根千枝（1967）．タテ社会の人間関係――単一社会の理論．講談社現代新書．
日本学生相談学会（2014）．学生の自殺防止のためのガイドライン．*http://www.gakuseisodan.com/wp-content/uploads/public/Guideline-20140425.pdf*（2019/04/24取得）．
Takai, J. & Ota, H. (1994). Assessing Japanese Interpersonal Communication Competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224–236.
梅原利夫（2011）．コミュニティ支援への理論的・実践的なアプローチ　――大学生に対するコミュニケーション・サポートの試行と課題――．和光大学総合文化研究所年報「東西南北」，2011, 141－154．

Abstract

Features of Interpersonal Relationship Related Problems of University Students in Japan

Tomomi Kurita, Teiji Uchino, Nanae Kojima,
Seikoku Kou and Hirotoshi Oshima

In this study, characteristics of interpersonal problems of Japanese university students were examined along with their psychological factors, and ways to cope were discussed.

Counseling records of four therapists working at university student counseling institutions were sorted into categories based on the contents using a qualitative method that conforms to the KJ method.　Psychological factors related to interpersonal problems were extracted and coping methods were studied.

Among the interpersonal problems categories, “interpersonal relationships” was the most cases, followed by “communication” and “harassment.”　Characteristics of the problems in each category were extracted.

Difficulties of interpersonal problems among Japanese students based on the characteristics of their problems seem to indicate three backgrounds related to communication skills which were unique to the Japanese culture: 1) consider your seniors and juniors, 2) consider the atmosphere surrounding you, and 3) do not say what you think.

It is suggested that by understanding the background of one’s problems, and by learning communication skills to express oneself, one may be able to resolve interpersonal problems.　It is also suggested that approaching one problem from multiple angles is possible and effective for university students.